

親と子の自然観察ゼミナール

博物館自然リサーチ報告書 (2)

都市の自然



鹿児島県立博物館

— 1999 —



は じ め に

身近な自然に親しみ、自然の美しさや不思議さを体験しながら、自然のしくみや、自然と人間とのかかわりについて考えることはとても楽しく、又、意義深いことです。

鹿児島県立博物館では、「路傍300種に親しむ運動」の流れを受けて、教育普及活動の一つとして「博物館自然リサーチ」を、5年間の継続事業で進めています。昨年度は、金峰町において、農村の自然に焦点をあててリサーチ活動を行い、すでに報告書にまとめました。

今年度は、最近都市化の進む国分市と隼人町をフィールドに、都市の自然に焦点をあててリサーチ活動を行いました。この冊子は、参加した親子118人による活動の成果をまとめたものです。

今回の『都市の自然』では、参加者の希望により、植物班、昆虫班、野鳥班、地質班の4つに分かれて、市街地やその近郊で、5月、7月、9月、11月の4回にわたって調査・観察等が行われました。参加者の中にはこの4回以外にも個人的に観察や調査を積極的に行った人も多かったようです。

参加者の貴重な基本報告をもとに作成された本書が、多くの人々にとって、身近な自然を理解し、見直すきっかけとなり、さらに人と自然の共生について考える一助となれば幸いです。これからも参加者の皆さんも含めた多くの方々が、身近な自然に親しんでいただくことを期待いたします。

最後になりますが、お世話になりました国分市教育委員会、隼人町教育委員会をはじめ、御協力をいただいた多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

平成11年3月

鹿児島県立博物館
館長 永喜久一

目 次

◇ はじめに

| | |
|-----------|----|
| I 事業概要 | 1 |
| II 観察地の概要 | 2 |
| III 活動内容 | |
| 植 物 | 4 |
| 昆 虫 | 12 |
| 鳥 | 24 |
| 地 質 | 35 |
| IV 参考資料 | |
| 植 物 | 53 |
| 昆 虫 | 67 |
| 鳥 | 76 |
| 地 質 | 83 |
| ◇ 参加者名簿 | 91 |

I 事業概要

博物館自然リサーチ「都市の自然」

博物館自然リサーチは、「自然との出会い、親子のふれあい」をキャッチフレーズに、平成9年度から5ヶ年計画で始まった。県内の親子を対象に、自然観察や調査活動をとおして親子の絆を深めるとともに、自然への関心を高め、人と自然との共生について考えるきっかけづくりを主な目的としている。

| 年度 | 平成9年度 | 10年度 | 11年度 | 12年度 | 13年度 |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|
| テーマ | 農村の自然 | 都市の自然 | 草原の自然 | 森林の自然 | 水辺の自然 |

平成10年度は「都市の自然」をテーマに、もっとも身近で、人の生活の影響を強く受けている市街地およびその近郊の自然を観察した。観察地には、近年、都市化が進行している国分市・隼人町を選んだ。これらの地域では、人口の増加とともに、市街地が周りの農耕地や丘陵地にも進出し、いろいろな建造物が建つなど、人為的な自然環境の変化がみられる。

観察会は年4回行った。国分市・隼人町を中心に県内各地から応募した親と子118人が参加し、それぞれの希望により植物、昆虫、鳥、地質の4班に分かれて観察や調査を行った。また、年間をとおして各自のテーマで日常的な観察・調査活動も行った。



日程および主な活動内容

| 観察会 | 第1回 | 第2回 | 第3回 | 第4回 | |
|----------|--|---|---|--|---|
| 活動内容 | 5月17日(日) | 7月12日(日) | 9月13日(日) | 11月15日(日) | 3月 |
| 観察会での活動 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 班の編成 ・ 観察テーマ設定 ・ 観察方法の習得 ・ 現地観察 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 現地観察 ・ 結果の検討 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 現地観察 ・ 結果の検討 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 現地観察 ・ 観察結果のまとめ ・ 報告書作成 ・ 結果の検討 | <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 報告書 「都市の自然」 の刊行 </div> |
| 日常的な観察活動 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 各自の観察、調査、テーマの設定 ・ 各自の観察、調査 | | | | |

II 観察地の概要

国分市と隼人町

国分市と隼人町は鹿児島県本土のほぼ中央部にあり、鹿児島湾の奥にある国分平野の大部分を占めている。「国分」という地名は「国府」に由来しており、奈良時代の和銅六年（713年）に建国された大隅国の国府所在地であった。同じく隼人町も古代からの政治・経済の中心地として栄えてきている。

国分市は昭和30年に市制施行を行い、現在の人口は約5万人で、農業や商業だけでなく工業も盛んな鹿児島県内でも活気を帯びた都市となっている。隼人町は昭和29年に町制施行を行い、人口2万5千人で国分市と同じく工業も盛んであり活気を帯びている。

国分市と隼人町の地形は山地と台地、平野に分けられ、中央部を県内第3位の長さの天降川が南北に流れており、それに応じて生物的自然も変化に富んでいる（図-1）。地形的には国分市や隼人町の北部から東部にかけては、標高200～250mで平坦な「シラス台地」が広がり、国分市ではそれに標高500～600mの山地が続いており、いわゆる上場と呼ばれる地域が国分市の面積の70%を占めている。台地の下には広々とした平野が広がり、国分平野をつくっている。国分平野は天降川をはさんで東西2つの部分に分けられるが、東側が西側より広がっている。これらの平野は稲作を中心に農地として利用されてきたが、最近の人口増加により急速に住宅地になって都市化が進んでいる。

天降川は宮崎県の加久藤盆地から流れて牧園町を南下し、隼人町西光寺で霧島山から流れて霧島町を南下する霧島川と合流し、そのまま南下して鹿児島湾に注いでいる。天降川はかつては国分市広瀬付近で鹿児島湾に注いでいたが、江戸時代の寛文年間（1660年代）に川筋直しが行なわれ、現在の天降川（新川）となっている。

国分市の北部から東部に広がる山地は、中生代白亜紀に堆積した^{しまんと}四万十層群の砂岩や頁岩からできている。平野の背後に広がる台地は、岩石からできたものとシラスからできたものの2つに区分できる。国分市の上野原台地の南側と西側は垂直に切り立っているが、この崖は始良カルデラのカルデラ壁の一部になっている。台地をつくる岩石は数十万年前の噴火で流れ出た安山岩の溶岩からできている。

山地の裾野を埋めるように広がるシラス台地は、宮崎県の加久藤カルデラや鹿児島湾奥部にある始良カルデラからの噴出物が何枚も積み重なってできている。隼人町の背後には岩石からできた垂直な崖が続いているが、崖の下の部分は百万年以上前に海底にたまった地層からできており、上部は約30万年前に加久藤カルデラから噴き出した火砕流のたい積物が固まってできた岩石からできている。国分市街地の城山や岩戸、隼人町の姫城付近でも垂直な崖をつくる岩石が見られるが、これは約5万年前に始良カルデラから噴き出した火砕流のたい積物が固まってできた「溶結凝灰岩」という岩石である。

シラス台地の上半分をつくっている噴出物は、まだ固まっていない白色の軽石混じり火山灰で「シラス」と呼ばれているが、これも始良カルデラから約2万5千年前に噴き出した^{いと}入戸火砕流

という火砕流のたい積で、県本土のほとんどを埋めているものである。

シラスの上にはローム層や桜島、^{きかい}鬼界カルデラから噴き出した軽石や火山灰が積もっている。上野原台地では約9千5百年前の縄文時代の集落跡が発見されているが、これは桜島から噴き出した軽石によって覆われており、この頃からすでに国分市には人が住んでいたことがわかる。

平野をつくる地層は砂や泥がたまってできたもので、まだ十分に固まっておらず柔らかい。これらの砂や泥は背後にある山地やシラス台地が削られ、それが天降川や^{けんこう}検校川などで運ばれてきたものである。場所によっては強い川の流れを示すような、地層の切り合いなども見られる。

市街地は平野部に立地しており、昭和30年代には国分駅前周辺や隼人駅周辺に集中していたが、その後の工場進出などにより昭和50年代から急速に市街地が広がり、既存の集落を核に新しい市街地がつくられつつある。とくに南部～南西部側では、道路沿いに商業地が拡大し、国分市と隼人町とが一体化してきている。

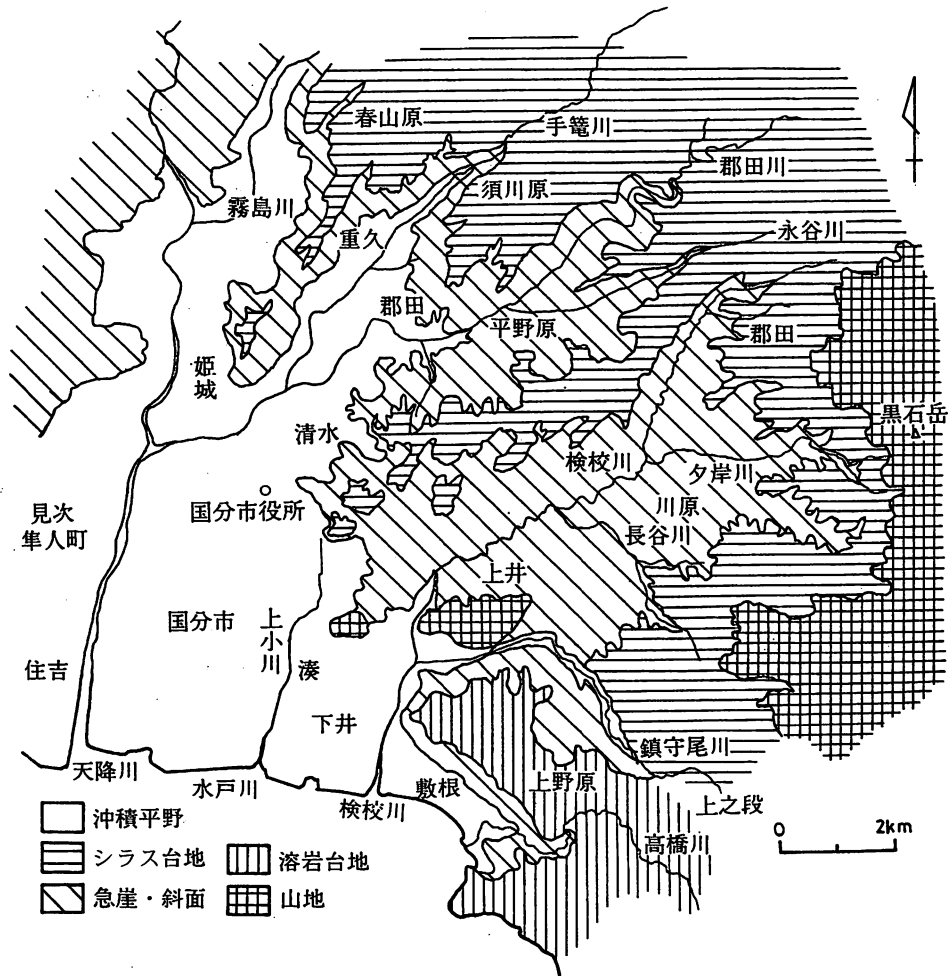


図-1 国分市と隼人町の地形区分

Ⅲ 活 動 内 容

〈植物－1〉

都 市 の 植 物 を 調 べ る

泉 靖 子

1 調 査 内 容

都市に多い植物を調べるために、国分市内で都市らしいところを選んで、そこに生えている植物について調べてみました。(調査方法は別添の資料を参考)

① 調 査 地

以下のA、Bの2地点で調査しました。

A：シビックセンター前の芝生(50×20m²)

B：シビックセンター前にある街路樹(ケヤキ)の下にあるコンクリートブロックの間(半径1mの円内)を3ヵ所

② 植 物 の 種 類

別表(植物リスト調査表)

③ 都 市 に 多 い 植 物 の 原 産 地

植物リストに現れた帰化植物を原産地別に分けてみました。()内は出現場所

北アメリカ原産

- ・アメリカフウロ(A)
- ・セイタカアワダチソウ(A, B)
- ・ヒメムカシヨモギ(A, B)
- ・アメリカセンダングサ(B)
- ・ホウキギク(B)

南アメリカ原産

- ・ムラサキカタバミ(A)

熱帯アメリカ原産

- ・チチコグサモドキ(A, B)

ヨーロッパ原産

- ・オランダミミナグサ(A, B)
- ・オオイヌノフグリ(A)
- ・コメツブツメクサ(A)
- ・タチイヌノフグリ(A)
- ・ネズミムギの仲間(A)

アフリカ原産

- ・ベニバナボロギク(A, B)

④ 都 市 に 多 い 植 物 の 広 が り 方

植物リストに現れた植物について、一部を広がり方によって分けてみました。

- 実が熟すと、自分の力ではじけて散るもの

マメ科(レンゲ, コメツブツメクサ, タンキリマメ, スズメノエンドウなど)

アメリカフウロ, スカシタゴボウ, カタバミ

- 風に運ばれて散るもの

- ・ パラシュートや翼を持つもの

タデ科(スイバ, イタドリなど)

キク科(ヨモギ, オニノゲシ, セイタカアワダチソウ, チチコグサモドキ, ノゲシ, ヒメムカシヨモギ, ベニバナボロギク, コオニタビラコ, ハハコグサ, ケナシヒメム)

植物リスト調査表

No. 1

| 調査日: 平成10年5月17日 | | 調査地: 国分市シビックセンター芝生 | | 調査者: 泉, 別府, 徳永, 寺田 | |
|-----------------|-----|--------------------|------------|--------------------|--------------|
| 植物名 | 個体数 | 備考(生育場所・花期等) | 植物名 | 個体数 | 備考(生育場所・花期等) |
| コウライシバ | 3 | FL | スズメノエンドウ | r | FR |
| スズメノヒエ | 2 | | スズメノテッポウ | r | FL, FR |
| ヨモギ | 2 | | セイタカアワダチソウ | r | |
| スギナ | 2 | | タンキリマメ | r | |
| レンゲ | 1 | FL, FR | タチイヌノフグリ | r | FR |
| カタバミ | 1 | FL, FR | チチコグサモドキ | r | FR |
| アメリカフウロ | 1 | FL, FR | ドクダミ | r | |
| イタドリ | r | | ネズミムギ | r | FR |
| イチゴツナギ | r | FL | ノゲシ | r | |
| イノコズチ | r | | ノミノツツリ | r | FL, FR |
| オオイヌノフグリ | r | FR | ハハコグサ | r | FL |
| オニノゲシ | r | FL | ハマスゲ | r | |
| オランダミミナグサ | r | FR | ヒメコバンソウ | r | FL, FR |
| ギョウギシバ | r | FL, FR | ヒメムカシヨモギ | r | |
| クスノキ | r | | ベニバナボロギク | r | |
| コオニタピラコ | r | FR | ムラサキカタバミ | r | FL |
| コスナビ | r | FL, FR | ヤエムグラ | r | FR |
| コメツツメクサ | r | FL, FR | ヤマノイモ | r | |
| ジシバリ | r | | | | |
| スイバ | r | | | | |

植物リスト調査表

No. 2

| 調査日: 平成10年5月17日 | | 調査地: 国分市シビックセンターケヤキ街路樹下 | | 調査者: 泉, 別府, 徳永, 寺田 | |
|-----------------|-----|-------------------------|------------|--------------------|--------------|
| 植物名 | 個体数 | 備考(生育場所・花期等) | 植物名 | 個体数 | 備考(生育場所・花期等) |
| ヒメムカシヨモギ | 2 | | ヒナギキョウ | 1 | FL, FR |
| アメリカセンダングサ | 1 | | ベニバナボロギク | r | |
| アメリカフウロ | 3 | FL, FR | ホウキギク | 1 | |
| イヌホオズキ | 2 | | メヒシバ | 1 | |
| オオアレチノギク | 2 | | コオニタピラコ | 1 | FL |
| オオイヌタデ | 1 | | コマツヨイグサ | 2 | |
| オランダミミナグサ | 1 | | シロツメクサ | 2 | |
| カモジグサ | 2 | FR | スイバ | 1 | |
| カラスノエンドウ | 2 | FR | スカシタゴボウ | r | FL, FR |
| ケナシヒメムカシヨモギ | 1 | | スギナ | 1 | |
| ネズミノオ | r | | セイタカアワダチソウ | 1 | |
| ノゲシ | r | | セトガヤ | 2 | FL, FR |
| ノミノツツリ | 1 | FL, FR | センダン | r | |
| ハマスゲ | 1 | | チチコグサモドキ | 1 | |
| ハハコグサ | 1 | | | | |
| ニワホコリ | 2 | FR | | | |
| ヨモギ | 2 | | | | |
| レンゲ | 2 | FL, FR | | | |
| ヤハズソウ | 1 | | | | |
| ツメクサ | 1 | | | | |

カシヨモギ、ヒメムカシヨモギ、オオアレチノギク、ホウキギク、ジシバリなど
カヤツリグサ科（ハマスゲなど）

・ 軽い種子・胞子

タチイヌノフグリ、ノミノツヅリ、オオイヌノフグリ、ヒナギキョウ

イネ科 コウライシバ、スズメノヒエ、イチゴツナギ、ギョウギシバ、ヒメコバンソウ、ネズミムギ、スズメノテッポウ、シダ植物（スギナなど）

○ 動物にくっついて広がる

ヤエムグラ、イノコズチ

アメリカセンダングサ

○ 動物が食べその糞とともに広がる

センダン、クスノキ

○ 地下茎・地上茎で広がるもの

ムラサキカタバミ、ハマスゲ

ドクダミ、ジシバリ

※ 都市の植物には帰化植物や風に運ばれて種子を散らす植物が多いことが分かりました。



2 感 想

都市の自然といえば、私には人工的に造られた緑のイメージがつきまとっていました。しかし、今回の調査に参加して、自然の植物（雑草）の力強いことに感動しました。生存競争が厳しく、仲間を増やすために、あらゆる知恵を使って生えている姿を見て、自然の植物に少しずつ興味をもつようになりました。「なぜ、植物がそこに生えているのか」を考えることは、植物を取り巻く自然環境も考えることに発展していきます。

今回は、植物を採取しながら、いろいろ植物について講師の先生に教えていただきました。その中で、興味深く感じた幾つかを挙げてみます。

レンゲの根粒の大きいこと。根粒菌と共生して、こんなに大きな栄養タンクを持っている植物は、緑肥にはもってこいです。田んぼが一面レンゲの花でピンク色に染まっている風景は、とても美しい。その地面の下では、根粒菌が大活躍しているのです。また、実が熟した時に、種が飛び出すしくみは、子供たちにとっても興味をそそるものでした。

そして、ストレスの度合（例えば、日当たり、人に踏みつけられる頻度）で、植物の育ち方が、随分違ってきます。植物の育つ様子は、ひとの子供の成長とそっくりではないでしょうか。

今回の調査は、残念ながら、第1回しか参加できませんでしたが、幼い子供と共に、植物に親しむきっかけになりました。

野 草 を 食 べ る

別 府 真理子

7月、「野草を食べる」という興味深い企画にワクワクしながら親子で出かけてみました。場所は国分市。縄文時代の息吹を今に伝える上野原遺跡の見学をした後、近くの山野に入りました。ワゴン車に乗り、でこぼこの山道をしばらく走っていくと、そこには、エノキ、ムクノキ、イヌビワ、ハクサンボク、タラノキ、ヤブミョウガ、クワ、オオバチドメ、ベニバナボロギク、キランソウ、ツワブキ、ピナンカズラ、オトコエシ、アキノタムラソウ、オニユリ、ミツバなどいろいろな植物がありました。どれが食べられるのだろうか。一見したくらいでは見当もつきません。食べると中毒を起こす植物もあるというので、慎重にツユクサ、ミツバ、ヤブミョウガ、オニユリ、ホウライチクや畑から逃げ出して生えていたカボチャの花や若芽などを摘みました。野草を摘みながらゾウムシという珍しい昆虫も見つけ、子供たちはおおはしゃぎでした。

それから山を降りて国分市のキャンプ場へ行きました。先程摘んだ野草を食べようというわけです。野草の食べ方には、「生」「塩を入れてゆでる」「ゆでてあくを抜く」「天ぷら」「煎る」などの方法があるそうですが、今回は天ぷらにしました。

天ぷらは植物に含まれるあくを熱で分解させる料理方法です。まず、野草を洗い、食べられる位の大きさに切ります。次に、火をおこし、油をかけておきます。その間に天ぷらの衣を作り、適温になったところで衣をつけてすばやく揚げます。

皆で手分けしてやったせいか、予想した以上に早くでき、あつあつを頂くことができました。おいしく頂きながら、こんなに身近かなところに食材があったのかと改めて感じることでした。そして私たちが、いかに出来合いの食生活に慣れてしまっているかを考えるよい機会にもなりました。子供たちも大喜びで、いつもは食の細い長女もおなかがパンパンになるくらい食べていました。「野草の天ぷら」という普段食べ慣れない料理ということもあったのでしょうか、澄みきった青空の下で、大勢で取る食事はなんといっても食をそそったのだと思います。

こうして、自然にふれてみると新しい発見や感動がいっぱいです。このリサーチは私たち家族の忘れられない思い出になりました。そして、きっと子どもたちの心の財産になってくれたものと思います。



空き地や石垣の植物群落を調べる

徳永美智子

平成10年度の博物館自然リサーチのテーマは、“都市の自然観察”と言うことで、その対象都市として国分市とその近郊がとりあげられました。植物班に参加して、その調査の一部として国分小学校・国分高校に接する石垣、側溝、学校前の駐車場等を調査すると同時に、住宅地間の、人・車に踏まれる、または踏まれない空地の植生調査をおこなったので、その結果(表1~3)を報告し、2~3の感想をつけ加えたいと思います。

1 結 果

‘都市の自然’と言うと、まず考えることは、都市化が進むにつれて人為的なさまざまな要因が影響してくると思われれます。それによって成立した植生は、すべての都市に共通なものなのか気になります。

国分市は鹿児島湾の奥に位置する国分平野にあり、古くは国府もおかれ、政治的にも栄えた時期があったと言われており、しかも背後にひかえる霧島山系は、観光地としての開発が進み現在に至っています。そのため‘自然’は人為的影響を受けて大きく変わってきたものと思われれます。その結果がどのように植生に現われるかに注目してみたい。

国分小学校は城跡にあり、学校の歴史も100年を越えていますが、現在の石垣は城が建てられた当時のものではないようです。(図-1)

石垣の植生は表に示すように、イノモトソウ、イタチガヤ、オオイタビ、ホラシノブ、ノキシノブ、カラムシ、イタビカズラ、ゲジゲジシダ、ハマスゲ、ミツデウラボシ等々がみられました。「路傍300種」の本を参考にすると、何れも石垣、崖や人家近くにみられるとされていましたので、此処でも同様のものがあり、私たちに身近な植物からなる群落でした。

人・車に踏まれる、またはそうでない空地については、前者はギョウギシバ、メヒシバ、ヤハズソウ、コニシキソウ、ニワホコリ、コウライシバ等の草丈が低く、地表面をほうように伸びる植物が多くみられました。後者は、アレチハナガサ、ハルシヤギク、ハルジオン、セイタカアワダチソウ等で、前者のものより背丈がやや高く、また、かつては日本に自生してなかった帰化植物といわれる種からなる群落でした。

アスファルトの割れ目にも‘緑’がみとめられました。コニシキソウ、タチスズメノヒエ、コマツヨイグサ、メヒシバ、オヒシバ、スズメノヒエ等でした。



2 感 想

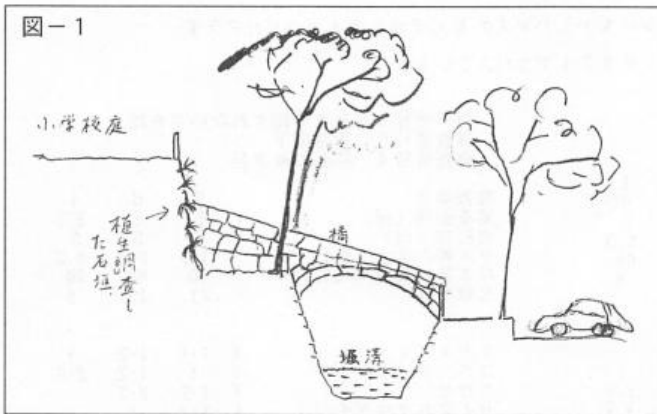
都市はコンクリートに囲まれた所が多く、こんな所でどれだけの観察ができるのだろうか、と思われましたが、アスファルトやコンクリートの割れ目、敷石、石垣のつぎ目等、どんなにせまい所でも確実に‘緑’がみとめられました。

特に今回は石垣に注目しました。石垣は石が急斜面に積まれていて、その石と石の間に、細い割れ目があります。またつぎ目に、巾何mmかのテラスができ、それに少量の土がくっついてあります。これは植物の生育にはよくない場所ですが、植物によっては特にこのような場所を選んで生えるものがあるようです。この悪条件に耐えて、着生する植物のもつ性質に大変興味をひかれました。

また、石積みと言うと、それを築いた太古の人々に思いを馳せます。彼等もその当時、必要上、石を築いたにちがいません。その頃、どのような植物が石の間にみられたのでしょうか。またそれをどのような思いで彼等はみたのでしょうか。等々……

そして現在、どれだけの人がこのような世界に目を向けるのでしょうか。むしろ太古の人々より現代人はこんなことを考える余裕がないのかも知れません。単に、石垣のつぎ目の植物についてみても、その他にいろいろの事を考えることができます。例えば石や土の性質、気象条件、地史等、どれ一つとっても興味深い研究テーマのように思えます。このように“自然”は情報の宝庫であり、それを何時も我々人間に提供しているのに、我々がそれをとりあげるか、とりあげないか、であるように思えました。

博物館リサーチに参加して、身近な自然の様々な姿を痛いほど感じさせられました。



石垣の植生



ミツデウラボシ

石垣の植生

| | | | | | | |
|-------------|-----|-----|-----|----|-----|------|
| 調査番号 | 7 | 8 | 11 | 12 | 9 | 10 |
| 調査面積 (㎡) | 30 | 8 | 2.5 | | 10 | 45 |
| 海拔高 (m) | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 | 10 |
| 草本層の高さ (m) | 0.8 | 0.3 | 1.2 | | 0.3 | 0.25 |
| 草本層の植被率 (%) | 30 | 20 | 30 | | 30 | 40 |
| 出現種数 | 23 | 18 | 20 | 16 | 12 | 10 |

| | | | | | | | |
|-------------|---|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| イノモトソウ | K | +2 | + | 1-2 | 1-2 | ・ | +2 |
| イタチガヤ | K | 3-3 | +2 | ・ | 3-4 | 1-2 | 1-2 |
| コナスビ | K | + | + | + | + | + | ・ |
| ミツデウラボシ | K | 1-2 | 1-2 | ・ | +2 | 1-2 | ・ |
| オオアレチノギク | K | + | + | ・ | + | ・ | + |
| ヘクソカズラ | K | ・ | + | + | + | ・ | + |
| オオイタビ | K | 1-2 | 1-2 | ・ | ・ | 1-2 | 1-2 |
| ケナシヒメムカシヨモギ | K | + | + | + | ・ | ・ | ・ |
| ホシダ | K | ・ | ・ | +2 | ・ | 2-3 | 1-2 |
| ホラシノブ | K | +2 | ・ | ・ | 1-2 | 2-3 | ・ |
| カニクサ | K | + | ・ | +2 | ・ | +2 | ・ |
| コブナグサ | K | + | + | ・ | ・ | ・ | ・ |
| イヌビロ | K | + | + | ・ | ・ | ・ | ・ |
| イヌタデ | K | + | + | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ウチワゴケ | K | + | + | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ヒメジョオン | K | ・ | ・ | + | 1-2 | ・ | ・ |
| コニシキソウ | K | ・ | ・ | + | + | ・ | ・ |
| コケオトギリ | K | + | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| コミカンソウ | K | + | ・ | + | ・ | ・ | ・ |
| タチシノブ | K | +2 | ・ | ・ | ・ | ・ | + |
| キツネノマゴ | K | ・ | + | ・ | 1-2 | ・ | ・ |
| コオニタヒラコ | K | + | ・ | ・ | ・ | ・ | + |

(出現1回の種)

- (調査番号7) クラマゴケ K +2, ハマヒサカキ K +, センニンソウ K +, カタバミ K +, アキメヒシバ K +2, クスノキ K +2
- (調査番号8) マメツタ K 2-3, コゴメスゲ K 1-1, タチツボスミレ K +, クロガネモチ K +, ノキシノブ K +2
- (調査番号11) セイタカアワダチソウ K +2, イヌホオズキ K 1-1, カラムシ K 3-4, メヒシバ K 1-2, センダン K +, スギナ K +, アオギリ K +, ヨモギ K +, ママコノシリヌグイ K +2, アオスゲ K +
- (調査番号12) ススキ K +, ミゾシダ K +2, ツボクサ K +, ベニバナボロギク K +, イズセンリヨウ K +
- (調査番号8) コウライシバ K +2, ハマスゲ K +, チガヤ K +, イタヒカズラ K 1-2, ゲジゲジ K +
- (調査番号9) ホウライシダ K 3-4, アツバスミレ K +

踏まれる空地の植生

| | | | | |
|-------------|-----|-----|-----|-----|
| 調査番号 | 2 | 3 | 1 | |
| 調査面積 (㎡) | 4 | 10 | 4 | |
| 海拔高 (m) | 5 | 5 | 5 | |
| 草本層の高さ (m) | 0.1 | 0.3 | 0.3 | |
| 草本層の植被率 (%) | 30 | 70 | 60 | |
| 出現種数 | 4 | 17 | 6 | |
| メヒシバ | K | +2 | 2-3 | + |
| ニワホコリ | K | 2-3 | +2 | ・ |
| タチスズメノヒエ | K | +2 | 1-2 | ・ |
| オヒシバ | K | + | + | ・ |
| コニシキソウ | K | + | + | 1-2 |
| ハマスゲ | K | ・ | + | 4-4 |

(出現1回の種)

- (調査番号3) ヒメジョオン K +, コウライシバ K 2-3, チャガヤツリ K +, カゼクサ K +, ケナシヒメムカシヨモギ K +, キョウギシバ K 4-4, ヒメムカシヨモギ K +, オオバコ K +, ネズミノオ K +, マメグンバイナズナ K +, ヤハズソウ K 1-1
- (調査番号1) ドクダミ K +2, エノコログサ K +, イヌガラシ K +2

調査番号5 あまり踏まれない空き地
調査番号6 街路樹下
調査番号4 路面の継ぎ目

| | | | |
|-------------|-----|-----|-----|
| 調査番号 | 5 | 6 | 4 |
| 調査面積 (㎡) | 5 | 8 | 2.5 |
| 海拔高 (m) | 5 | 5 | 5 |
| 草本層の高さ (m) | 1.5 | 0.8 | 0.2 |
| 草本層の植被率 (%) | 80 | 80 | 20 |
| 出現種数 | 21 | 19 | 6 |

| | | | | |
|------------|---|-----|-----|-----|
| タチスズメノヒエ | K | 1-1 | 1-2 | + |
| コニシキソウ | K | + | 1-2 | 2-3 |
| チガヤ | K | 1-2 | 2-3 | ・ |
| セイタカアワダチソウ | K | 1-2 | + | ・ |
| ギョウギシバ | K | +2 | 2-3 | ・ |
| ヨモギ | K | + | + | ・ |
| メヒシバ | K | ・ | 1-2 | + |
| オヒシバ | K | ・ | 2-3 | + |

(出現1回の種)

- 調査番号5 (あまり踏まれない空き地) アレチハナガサ K 2-3, ヤナギハナガサ K +, イヌホオズキ K +, ハルシヤギク K 2-3, アメリカセンダングサ K +, ママコノシリヌグイ K +, ホウキギク K +, ネズミノオ K 2-3, カニクサ K +, スギナ K +, アキノノゲシ K +, オオイタビ K +2, ヒメムカシヨモギ K +, ススキ K +, アンボウ K 3-4
- 調査番号6 (街路樹下) スベリヒユ K +, ヘクソカズラ K +, ヨメナ K +, チチコグサモドキ K +, チドメグサ K +, ハマスゲ K 2-3, アキメヒシバ K 1-2, オオバコ K 1-2, トキワハゼ K +, カタバミ K 1-2, ウリクサ K 1-2
- 調査番号4 (路面の継ぎ目) スズメノヒエ K +, コマツヨイグサ K +

街角植物ウォッチング

別府 優一郎

道端に可憐に咲く花がある。たくましく繁茂する草がある。都市で目にする野草の素顔をみるために、家族で出かけることにした。

街の彩りを豊かにしてくれる植物の種類は多い。垣根に使われる樹木もそのひとつだ。春から夏にかけて花を咲かせ、秋に実をつける樹木もあれば、冬の寒さの中で花を咲かせる樹木もある。新しく区画整地された市役所周辺の街路樹にはケヤキが、植え込みにはシャリンバイ、サザンカ、モッコクなどが使われていた。道端に落ちていたケヤキの葉の大きさを調べてみると、小さいものは2cm、大きいものは12cmもあった。同じ樹でも高さや向きによって、葉の大きさや形が違っていた。シャリンバイは枝が幹の回りに車輪のように出て、花が梅に似ていることによる。奄美大島では、テーチキと呼ばれ、幹や根を細かくして乾燥させ、それを煮だして大島紬の染料として使う。モッコクの実の中には2～5個の種子があり、なかには6個というのもあった。

垣根の下にも、カタバミ、ドクダミ、チガヤ、タマシダ、オシロイバナなどいろいろな種類の植物を見つけることができた。カタバミは、葉の片側が欠けているように見えるところからその名が付いたという。その花柄は長く伸び、種子を遠くにはじき飛ばすために勢いよく立ち上がっていた。タマシダの根には1cmほどの球が数個ついており、それらは水をいっぱい含んでいた。日照りの時の水不足に耐えられる作りになっているのだ。植物の生きる知恵から学ぶべき事が多かった。日当たりなど決して生育条件はよくないはずだが垣根の下にもなかなかの個性派がそろっていた。

オシロイバナの種子を潰して顔に付け合う子どもたちの楽しげな様子を見ながら、今回も参加してよかったと思うことであった。

「はっぱずもう」

鹿児島市立荒田小1年 ベっぶ ちか

かんさつのとちゅう、クローバーを見つけました。

「それは、ムラサキカタバミというんだよ」といいながら

先生は、そのはっぱをとりました。

さっそく、先生とはっぱずもうをしました。

先生のほうがつよいかなとおもうとこわくなりました。

おもったとおり、さいしょは先生のかち。

でも、つぎはわたしがかちました。

そして、そのつぎもわたしがかちました。

わたしは、やったーとおもいました。



市街地やその近郊の昆虫調査

廣森 敏昭, 押尾 幸雄, 山下 秋厚

はじめに

平成10年度の自然リサーチは、「都市の自然」をテーマに実施した。昆虫班には、17家族42名の参加があり、構成は親18名子供24名であった。

調査地は、国分シビックセンターの駐車場及び周辺の水田、埋め立て地を中心としながら、時季を考慮して国分市内の公園の昆虫や河川の水生物も取り上げることにした。

一般に、都市には昆虫が少ない、ほとんどいないと考えがちである。確かに都市は、もともとあった自然を人間が活動しやすいように、住みやすいように作りかえた環境である。自然が壊されることで、そこに生息していた昆虫も一時は消えるだろう。しかし、そこが新しく造成され、人為的であっても新しい植物が植栽され、物や人の交流がおり、年月が経つにつれて、新しい昆虫も棲み付くはずである。

昆虫については、これまでも多くの調査・研究がなされているが、それらはほとんど自然の豊かな地域を対象としており、都市の自然を対象としたものは少ない。そういう意味でも今回の調査で、都市における昆虫の種類や時季的変遷、昆虫と人間の生活との関わりなどについて、少しでも明らかにすることができればよいと思っている。

1 調査内容

- (1) 国分シビックセンター駐車場周辺の昆虫生息調査
 - ア A地域（人為的に植栽された駐車場）、B地域（水田周辺）、C地域（造成地）での生息昆虫の比較
 - イ 5月、7月、9月、11月の年4回における時季的発生の比較
- (2) 公園の昆虫の観察（城山公園、台明寺溪谷公園）
- (3) 河川の水生物（国分シビックセンター周辺、国分小学校前、検校川）

2 調査方法

- (1) 年4回（5月17日、7月12日、9月13日、11月15日）の自然リサーチ調査活動で親子調査員及び博物館職員が採集、目撃などで調査したものを記録する。
- (2) 調査結果は、図表化できるものは図表化し、市街地・公園における生息状況の基礎資料を作成する。
- (3) 基礎資料をもとに考察し、調査結果をまとめる。また、親子調査員の調査活動について感想等もまとめる。

3 調査対象地域の概要

- (1) 国分シビックセンター周辺

国分シビックセンターは、水田の埋め立て地に作られており、市役所、図書館等の公共施設及び駐車場から成る。駐車場内には、噴水池、芝生、ケヤキとマテバシイの並木、数本の

カナメモチとクチナシが植栽されている。水田は、5月下旬から10月までは稲作が行われる。休耕田には湿地の植物が生い茂っている。周辺には公共施設や大型店舗などの他、雑草の生い茂った造成地と裸地の造成地もあり、終日人や車の通行量の多いところにある。全体的に昆虫類の生息環境として必要な樹木や吸蜜植物、食草などはその種類も少ない。

(2) 城山公園周辺

城山公園は市街地に近く、標高は192m、面積は13.9haである。公園内には芝生が植えられ、樹木はサクラ、サザンカ、ツツジなどが植栽されているが、花壇はほとんどなく草花は少ない。周辺の山にはスギなどの人工林のほかにアラカシ、スダジイなどの雑木林も残っている。

(3) 台明寺溪谷公園

台明寺溪谷は、国分市の北側に位置し、自然の作り出した石畳を利用して作られた水辺の公園である。周辺には、シイやアラカシ、イヌビワなどの樹木とクズ、チガヤなどの雑草も豊富である。

4 調査結果及び考察

(1) シビックセンター周辺の昆虫生息調査

+++ (10頭以上) ++ (5～9頭) + (2～4頭) 無印 (1頭)

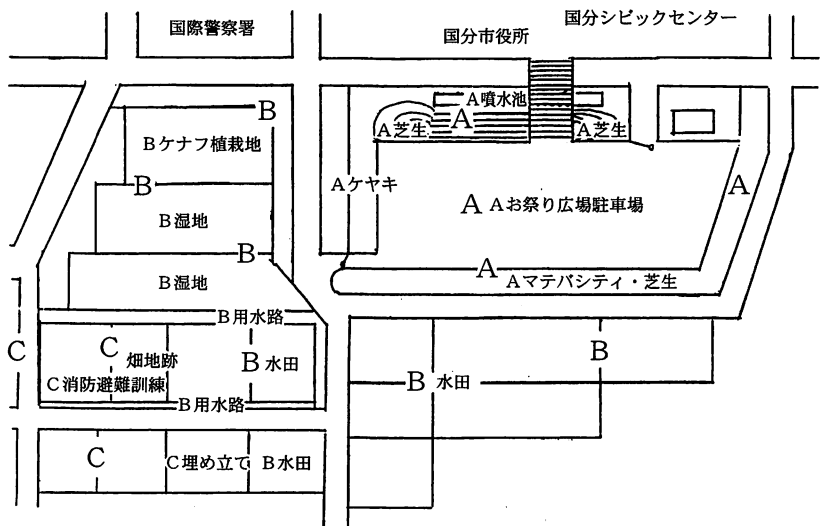
目撃・採集場所

A地点……駐車場周辺

B地点……水田周辺

C地点……造成地周辺

図-1 調査対象地域図と調査区分(A・B・C)



※ 11月15日当日はシビックセンター駐車場で市があり調査ができなかったため、城山公園・大明寺溪谷公園を調査した。シビックセンター駐車場周辺の調査は、翌日の16日に博物館職員が調査した結果である。

ア 鱗翅目 (19種)

| 科名 | 種名 | 5月17日 | 7月12日 | 9月13日 | 11月16日 |
|-------------|---|--|----------|-----------------------|--------|
| アゲハ チョウ科 | ナミアゲハ ナガサキアゲハ アオスジアゲハ | | | B A A | |
| シロ チョウ科 | モンシロチョウ モンキチョウ キチョウ | A++B+C++ B C B | A+ A+ | A+ B B+ A++B+C+ | B |
| タテハ チョウ科 | ツマグロヒョウモン ヒメアカタテハ タテハモドキ | A++ C B C+ | | A++ (幼虫) | |
| シジミ チョウ科 | キタテハ ベニシジミ ヤマトシジミ ツバメシジミ ヤクシマルリシジミ ムラサキツバメ | B A B C++ A++ A B | A++ | B+ A++ A+++ | A+ B |
| セセリ チョウ科 | イチモンジセセリ チャバネセセリ クロシタアオイラガ | B B | | B A+ | |
| ガ類 | オオスカシバ | | | | A+ |
| 時季別目撃回数 | | 19 | 3 | 18 | 5 |
| " 種類 | | 13 | 3 | 13 | 4 |
| 地点別目撃回数 | | A地点 $\begin{cases} 19 \\ 14 \end{cases}$ B $\begin{cases} 19 \\ 12 \end{cases}$ C $\begin{cases} 7 \\ 6 \end{cases}$ | | | |
| " 種類 | | | | | |

- ・ 埋め立て地で樹木が少ないため、森林性のアゲハチョウ科やガ類が少なく、草原性のチョウが多く見られた。
- ・ 人為的に持ち込まれたり、それに付随して生えたりした植物を食草・食樹としているチョウが多く見られた。
例 パンジー…ツマグロヒョウモン、ヨモギ…ヒメアカタテハ、カタバミ…ヤマトシジミ
マテバシイ…ムラサキツバメ・クロシタアオイラガ、クチナシ…オオスカシバ
- ・ チョウ類の出現は、5月、9月の春と秋が多く、7月は極端に少なかった。この理由としては 7月12日のシビックセンター周辺は、アスファルトの照り返しが強く、芝生に手を当てても暑さを感じるほどだったので、昆虫が活動するには気温が高すぎるということが考えられる。

イ トンボ目 (3種)

| 科名 | 種名 | 5月17日 | 7月12日 | 9月13日 | 11月16日 | |
|------|---------------------------------|--------------|--------------|------------------------|------------|------------|
| トンボ科 | ウスバキトンボ シオカラトンボ オオシオカラトンボ | C | A+++B+++C+++ | A++ B+++C+++ A B | | |
| | 時季別目撃回数 | 1 | 3 | 5 | 0 | |
| | ” 種類 | 1 | 1 | 3 | 0 | |
| | 地点別目撃回数 | A地点 < 3 2 | | | B < 3 2 | C < 3 2 |
| | ” 種類 | | | | | |

- ・ 水田はあるが、池や溜まり水などが少ないため、トンボの種類は少ない。
- ・ 5月17日にはウスバキトンボは見られなかったが、7・9月には非常に多く見られた。ウスバキトンボの発生には、一定の温度が必要なのだろう。11月に消滅しているのは、温度のほかに稲刈りが終わり、用水路の水がなくなったなどの生息環境の変化も考えられる。

ウ 直翅目 (18種)

| 科名 | 種名 | 5月17日 | 7月12日 | 9月13日 | 11月16日 | |
|------------|---|----------------------------------|---------|---------------------|------------------------|--------------|
| バッタ科 | ショウリョウバッタ マダラバッタ トノサマバッタ イボバッタ フキバッタ | A++ B++ C++ A B C | A B+ C+ | C+++ C C C | B A B++ C | |
| ホグバッタ科 | オンブバッタ | | | | B | |
| ヒシ バッタ科 | ヒシバッタ ハネナガヒシバッタ トゲヒシバッタ | | | | B+++C+ B+++ B+++ | |
| イナゴ科 | ツチイナゴ ハネナガイナゴ | C | | B | | |
| キリギリ ス科 | ホシササキリ クビキリギス | B C | | | A | |
| コオロギ 科 | マダラスズ シバスズ タイワンエンマコオロギ キンヒバリ ヒロバネカントン | A++ (幼虫) A++ (幼虫) B C C | | B C | A | |
| | 時季的目撃回数 | 15 | 3 | 7 | 11 | |
| | ” 種類 | 9 | 1 | 6 | 8 | |
| | 地点別目撃回数 | A地点 < 8 7 | | | B < 13 11 | C < 14 11 |
| | ” 種類 | | | | | |

- ・ 直翅類のなかまは、時期的には春の5月と秋の11月に目撃する個体数・種類とも多い。5月に駐車場の芝生に多く見られたマダラスズなどは、酷暑の7月には全く見られ

ずそれ以降も見られなかった。秋の9月以降はバッタ科のトノサマバッタが、また11月にはヒシバッタ科のなかまが多く見られた。ショウリョウバッタはどの時季も見られた。

地点別の比較では、発生回数、種類ともA地点よりB・C地点が多かった。これは、B地点には休耕田の草やぶがあり、C地点には造成地の荒地に生えた雑草があるためと考えられる。

エ 半翅目・カマキリ目 (6種)

| 目名 | 種名 | 5月17日 | 7月12日 | 9月13日 | 11月16日 | | |
|---------|----------|---------|-------|---------|--------|-------|--|
| 半翅目 | マルカメムシ | B+ C+++ | | | | | |
| | ハリカメムシ | B C | | | | | |
| | アメンボ | A++ | A+ B+ | A+ B++ | | | |
| | クマゼミ | | | A+ (死骸) | | | |
| | ツマグロヨコバイ | B C | | | | | |
| カマキリ目 | オオカマキリ | C | | | A | | |
| 時季的目撃回数 | | 8 | 2 | 3 | 1 | | |
| " 種類 | | 4 | 1 | 2 | 1 | | |
| 地点別目撃回数 | | A地点 < 5 | | B < 5 | | C < 4 | |
| " 種類 | | 3 | | 4 | | 4 | |

オ 甲虫目 (13種)

| 科名 | 種名 | 5月17日 | 7月12日 | 9月13日 | 11月16日 | | |
|---------|--------------|----------|-------|-------|--------|-------|--|
| ゴミムシ科 | ゴミムシ | A | A | | | | |
| ケンゴウ科 | ヒメゲンゴロウ | | | A | | | |
| ハネカクシ科 | アオバアリガタハネカクシ | A | | | B | | |
| コガネムシ科 | ナラノチャイロコガネ | A | | | | | |
| | コアオハナムグリ | A | | | | | |
| | シロテンハナムグリ | | | A | | | |
| | ドウガネブイブイ | C | | | | | |
| ジョウカイ科 | セスジジョウカイ | C | | | | | |
| コマツムシ科 | サビキコリ | C | | | | | |
| テントウムシ科 | ナナホシテントウ | C++ | | A C | | | |
| | ヒメカメノコテントウ | C++ | | | | | |
| ガミキムシ科 | ゴマダラガミキリ | A+ | | A | | | |
| ハムシ科 | ホタルハムシ | | | | | | |
| 時季的目撃回数 | | 10 | 1 | 5 | 1 | | |
| " 種類 | | 10 | 1 | 4 | 1 | | |
| 地点別目撃回数 | | A地点 < 10 | | B < 1 | | C < 6 | |
| " 種類 | | 9 | | 1 | | 5 | |

- ・ 甲虫目では、A地点とC地点に種類が多かった。A・C地点ではマテバシイ、ネズミモチなどの人為的に植栽された樹木があり、その花や葉で目にする事ができた。

カ 双翅目 (7種)

| 科名 | 種名 | 5月17日 | 7月12日 | 9月13日 | 11月16日 | | |
|---------|----------|---------|-------|-------|--------|-------|--|
| ミズアブ科 | アメリカミズアブ | | | A++ B | | | |
| ハナアブ科 | ホソヒラタアブ | B C | | | B | | |
| | ハナアブ | C | | | | | |
| ヤドリバエ科 | ノコギリハリバエ | | | A | | | |
| ニクバエ科 | センチュクバエ | | | | A B | | |
| ムシキアブ科 | アオメアブ | | | B | | | |
| ヤチバエ科 | ヒゲナガヤチバエ | | | | B+++ | | |
| 時季的目撃回数 | | 3 | 0 | 4 | 4 | | |
| " 種類 | | 2 | 0 | 3 | 3 | | |
| 地点別目撃回数 | | A地点 < 3 | | B < 6 | | C < 2 | |
| " 種類 | | 3 | | 5 | | 2 | |

キ 膜翅目 (2種)

| 科名 | 種名 | 5月17日 | 7月12日 | 9月13日 | 11月16日 | | |
|---------|------------|----------|-------|-------|--------|-------|--|
| ミツバチ科 | ヨウシュミツバチ | A+++B+++ | | | | | |
| スズメバチ科 | フタモンアシナガバチ | | A | | A++ | | |
| 時季的目撃回数 | | 2 | 1 | 0 | 1 | | |
| " 種類 | | 2 | 1 | 0 | 1 | | |
| 地点別目撃回数 | | A地点 < 3 | | B < 1 | | C < 0 | |
| " 種類 | | 2 | | 1 | | 0 | |

- ・ 5月のヨウシュミツバチはマテバシイの花で、11月のフタモンアシナガバチはサクラの木の下で見かけた。どちらも駐車場周辺植栽木である。

ク 全昆虫 (68種)

| | 5月17日 | 7月12日 | 9月13日 | 11月16日 | 全合計 | |
|---------|----------|-------|--------|--------|--------|--|
| 時季的目撃回数 | 58 | 13 | 42 | 23 | 136 | |
| " 種類 | 32 | 8 | 31 | 18 | 重複 89 | |
| 地点別目撃回数 | A地点 < 51 | | B < 57 | | C < 36 | |
| " 種類 | 40 | | 36 | | 30 | |

- ・ 昆虫は全部で68種を確認できた。内訳は、鱗翅目19種、トンボ目3種、直翅目18種、半翅目5種、カマキリ目1種、甲虫目13種、双翅目7種、膜翅目2種である。鱗翅目が多いのはチョウがよく目につき、親子で採集しやすいこと、直翅目が多いのは休耕田や造成地に雑草が多く、バッタ類が住み着きやすいことなどによると考えられる。
- ・ 時季的には、5月・9月が多く、7月が少なかった。7月12日の調査時刻のころは、調査地周辺はアスファルトの照り返しが強く、気温が上がりすぎ、昆虫が活動しにくかったのではと考えられる。
- ・ 全昆虫の地点別目撃回数等は、C地点の面積が狭いことを考慮するとABC地点とも同じくらいである。しかし、A地点では直翅目が少ないとか、B地点では甲虫目が少ないとか、トンボ目と半翅目はどこも平均して見られるなど、個々の目や種を比較するとそれぞれの地点の植物や環境に関連した特色が見られる。

(2) 城山公園の昆虫生息調査 +++10頭以上 ++ 4～9頭 + 1～3頭

| 目 名 | 種 名 | 7月12日 | 11月15日 | 備 考 |
|-------|---|--|--------------------------------------|---|
| 鱗翅目 | モンキアゲハ カラスアゲハ キアゲハ ナミアゲハ モンシロチョウ キチョウ ツマグロヒョウモン ウラナミシジミ ミノガ | ++ + ++ + + + +++ + | + + + + | 7月にはアゲハ類とツマグロヒョウモンが多い ミノムシで見られた。 |
| トンボ目 | ウスバキトンボ オニヤンマ ギンヤンマ ヒメアカネ | +++ ++ + | + + | 7月ウスバキトンボ、オニヤンマが多くみられた |
| 甲虫目 | ノコギリクワガタ | ++ | | |
| ナナフシ目 | ナナフシ | + | | サクラの木の枝で捕獲 |
| カマキリ目 | オオカマキリ ハラビロカマキリ | | + + | 卵塊も発見 |
| 膜翅目 | ヒメハラナガツチバチ ヨウシュミツバチ | ++ | + + | 芝生のところに多い |
| ゴキブリ目 | サツマゴキブリ | | + | |
| 直翅目 | ショウリョウバッタ オンブバッタ ツチイナゴ ハネナガイナゴ マダラスズ セスジツユムシ | | + + + + + + | |
| 双翅目 | ホソヒラタアブ | | + | |
| 合 計 | 27 種 | 12 種 | 17 種 | |

- ・ 城山公園では、7月にシビックセンター周辺でほとんど見られなかった樹林性の昆虫（アゲハ類やオニヤンマ）とツマグロヒョウモンが多く見られた。この理由として、城山公園は国分市内であっても周囲に樹林が多いこと、芝生が多くスミレ類も多く生えること、標高も約200mあるので、アスファルトに囲まれたシビックセンター周辺より昆虫が活動しやすい環境にあることなどが考えられる。
- ・ 11月になると、これらはほとんど見られず、草原性の直翅類が多く見られるようになった。また、成熟した雌のカマキリも多く見られ、産卵された卵塊も見ることができた。
- ・ ウスバキトンボは7月にくらべ、11月はずいぶん少なくなっていた。

(3) 台明寺溪谷公園周辺の昆虫生息調査 +++10頭以上 ++ 4～9頭 + 1～3頭

| 目名 | 種名 | 9月13日 | 11月15日 | 備考 |
|------|-----------|-------|--------|--|
| 鱗翅目 | モンキアゲハ | + | | 道沿いに多い わき水を吸水 ヤマビワ周辺 クズ周辺 |
| | キチョウ | ++ | | |
| | ツマグロキチョウ | | + | |
| | イシガキチョウ | ++ | + | |
| | コムスジ | +++ | + | |
| | ツマグロヒョウモン | | + | |
| | スミナガシ | + | | |
| | クロコノマチョウ | | ++ | |
| | ウラギンシジミ | + | + | |
| | ムラサキシジミ | +++ | ++ | |
| | ヤマトシジミ | + | + | |
| | クロセセリ | + | | |
| トンボ目 | ハグロトンボ | ++ | | 昼は樹林の中 |
| | マイコアカネ | + | | |
| 直翅目 | ツチイナゴ | | + | |
| | トノサマバッタ | | + | |
| | ホシササキリ | | + | |
| | エンマコオロギ | | + | |
| 双翅目 | ウリハムシ | | + | |
| 膜翅目 | ヨウシュミツバチ | | + | |
| 合計 | 19種 | 11種 | 14種 | |

- ・ 9月は公園内の樹林の中で休息しているハグロトンボやムラサキシジミなどのチョウ類などが多く見られたが、11月になるとさすがに日の当たらない樹林付近では昆虫の姿を見ることはできなかった。

(4) 水生動物の観察（7月12日）

ア 国分シビックセンター周辺

スクミリングガイ、ヒメモノアラガイ、ヒルの一種、ツチガエル、ギンブナ、ミズムシ

イ 国分小学校前の小川

スクミリングガイ、ヒルの一種、ミズムシ、ドブシジミ

ウ 検校川中流

エラブタマダラカゲロウ、シロタニガワカゲロウ、コカゲロウ属一種、ヒゲナガカワトビケラ、コガタシマトビケラ、ウルマーシマトビケラ

5 ま と め

- ・ 今回のシビックセンター周辺の調査では、限られた回数・時間ではあったが68種を確認できた。
- ・ 調査地の環境は、比較的新しい造成地であるために食餌植物の種類が少ない。したがって、都市における生息昆虫の種類は、人為的に植栽された草花や樹木に影響されるといえそうだ。（特に、鱗翅目の種類と食草・食樹の関係から）
- ・ シビックセンター周辺の調査地では、造成地と休耕田があるためか、全昆虫類に対する直翅類の割合が高いといえる。
- ・ 時季的に見ると、アスファルトに囲まれた都市周辺は、夏の7月になると昆虫の種類が少なくなる。しかし、樹木の多い公園などは7月でも昆虫が生息しやすいといえる。（7月12日 鱗翅目 シビックセンター周辺3種に対し城山公園9種）
- ・ 市街地の水生動物は、ヒル、ミズムシ、スクミリングガイなどが主で、人間の活動によって有機物の多い汚れた水となっていること、山あいの検校川中流では、カゲロウやトビケラのなかまが多く、汚れの少ない水であることが分かる。
このようなことから、人為的に作られた都市環境が昆虫（水生生物）の生息にも大きな影響を与えているといえる。

調査員の記録や感想

1 7月12日

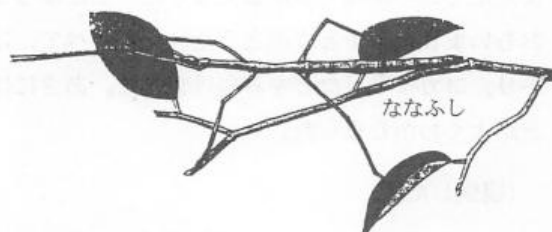
有村 すすか (4さい)

山野 勝, 裕 昭 (国分市立向花小学校2年)

チョウ



ナナフシ



バッタ



体の形が木の枝に似ていておもしろい。

有村 生子 (水生生物観察の感想)



浅い川に入って、親子とも初めて生き物を取りました。

大きい石をひっくり返すとみつけやすいことも分かりました。

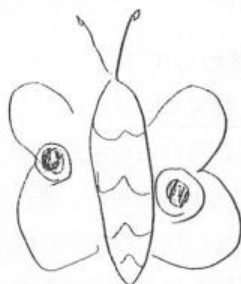
2 9月13日

坂元 一 巴 (隼人町立富隈小学校4年)

上和田 ゆ き (串良町立細山田小学校4年)



ちょうは、葉のうらがわにとまる。たまごは、葉のうらにうむ。(他の鳥などに食べられたりするから、また雨などから守るため)



タテハモドキ

20年くらい前から九州にほくじょうしてきた。

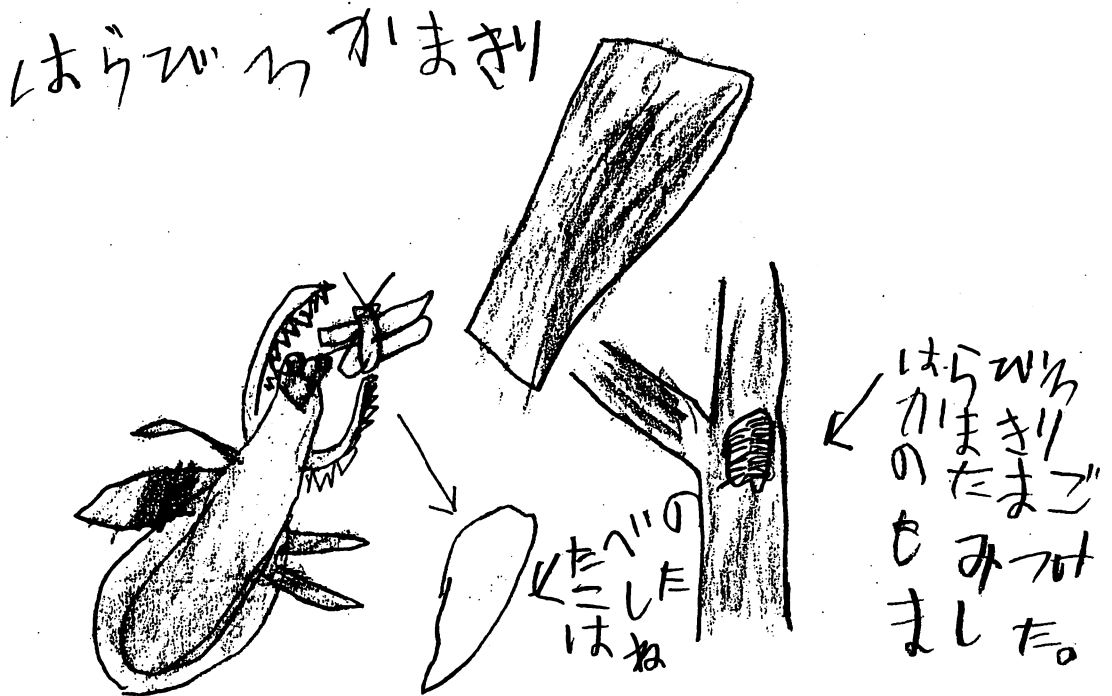
3 11月15日

有村 琢磨 (国分市立国分小学校1年)

しろ山こうえんの木にハラビロカマキリがいるのをみつけました。さいしょにたべたバッタは、オンブバッタでした。まえ足でひっかけてあたまからおしりまでぜんぶたべました。

つぎに、モンキチョウをつかまえたのでカマキリの虫かごに入れたら、とんでいるちょうをまえ足でひっかけてつかまえました。上にぶらさがっていたのにとりかたがじょうずだなとおもいました。チョウのどうたいだけたべて、はねはのこしていました。ほかにも、オオカマキリ、コカマキリなどをみつけました。あきにはかまきりがたくさんいたので、かまきりのことがよくわかりました。

(観察した絵)

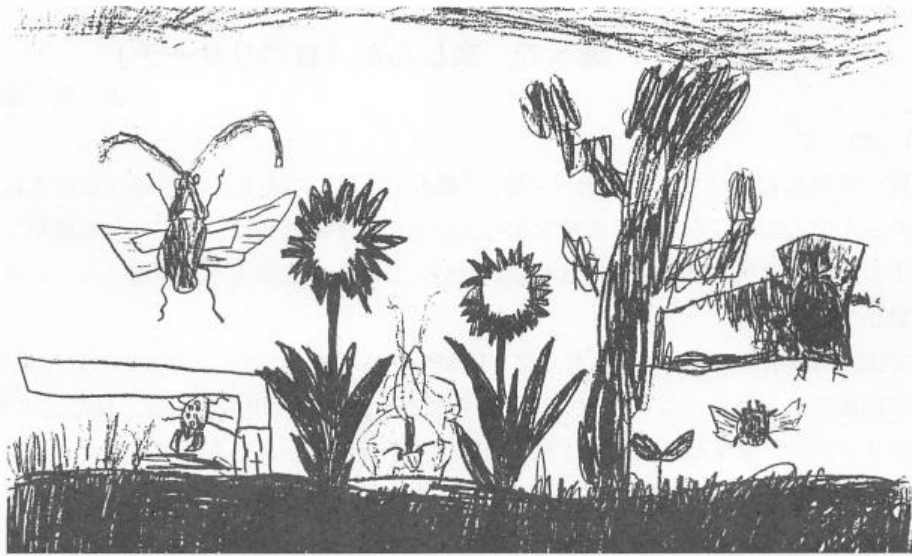


4 リサーチが終わって

立元 太輔 (5さい)

こんにちは。いろいろな虫がいて、とてもたのしかったです。2ひきのツチイナゴはカマキリにたべられてしまいました。また、ぼくのうちのはたけにもカマキリがいました。キチョウはしんでしまいました。カマキリはたまごをうみそうなくらいおなかがふくらんでいます。でも、きのうときょうはなにもえさをたべませんでした。これからもいろいろな虫をとってかんさつしたいとおもいます。

先生、ありがとうございました。



有村生子

普段の生活では、車でさっさと通過してしまっ、何も無いと感じている場所に立ち止まって虫さがしをしたことは、よい思い出になりました。

今回は、小1の息子と4歳の娘の2人の子供と一緒に参加でした。上の子にとって虫をとるということは、生まれて初めての経験です。第1回目の参加の時、1～2時間走りまわって、やっとチョウが1匹つかまえられたときは、とても感激していたようです。トンボはずばしこいのでなかなかつかまえられませんが、城山公園で走りまわってやっとつかまえたときは、喜んでいました。下の子は、1～3回目までは虫かごをもってついてくるだけでしたが4回目になると、自力でクロアリとバッタをつかまえて4歳なりに参加していて、小さな成長を感じとることができました。私は、

- ・トンボが空中で小さい虫をつかまえて食べていること
- ・一見何も無いような芝や草むらも、よくみるとバッタの幼虫などがいること
- ・ごきぶりが室外にけっこうたくさんいること

など、虫に関する話を興味深くきかせていただきました。子供も学校の行き帰りなど、季節の変化や虫などに興味をもって見ていくことと思います。親子共々、ていねいに教えていただきありがとうございました。

梶田美里 (単人町立小野小学校2年)

いろいろな虫を見つたり名前もおぼえたりして楽しかったです。

立元加奈

今回初めてリサーチに参加させていただきましたが、毎回先生方に丁寧に教えていただき、子供のみならず私自身も楽しく勉強させていただきました。大輔はこれから小学校へ入っても、ますます自然に興味を持って生活してくれることと思います。ほんとうにありがとうございました。

博物館にも遊びに行かせていただきたいと思います。

鳥を見て、調べて、楽しんだ「自然リサーチ」

山元幸夫

はじめに

本年度の博物館自然リサーチのテーマは、「都市の自然」である。平野部に形成された市街地にはたくさんの人間が住み、生活環境をよりよいものにするために、人工的な環境がつくられていて、手つかずの自然はほとんど残されていない。しかし、このような環境にも、いろいろな野鳥が生息している。

鳥班では、国分市の市街地で見られる鳥の観察や、鳥と人の生活とのかかわりについて調べた。また、双眼鏡で鳥を見るのは初めてという人も多かったので、川や田んぼ、林などへもでかけ、バードウォッチングを楽しみながら、鳥の見分け方や観察のしかたなどを学んだ。以下に、参加者からの報告などをもとに、観察地ごとに出現した鳥についてまとめてみた。

1 市街地で見られた鳥

都市は、人が生活するために作り上げた特殊な環境であり、多くの鳥にとっては決して住みよいところとは言えない。しかし、そういった所でも鳥は見られるし、近年はむしろ町中の鳥の種類が増えているとさえ言われている。

そこで、国分市の市街地一帯で見られる鳥の種類を調べてみた。調査は、年4回の観察会の時と、年間を通して参加者が都合の良い時に随時行った。その結果、次の16種類が観察された。

① チョウゲンボウ (ハヤブサ科)

12月、国分シビックセンターの建物に止まっていた。鹿児島県では冬鳥として、開けた農耕地などに飛来し、小鳥やネズミ、バッタなどを食べる。関東地方ではビルや橋桁などの人工物に巣を作る例が増え、都市に進出しつつある鳥として知られている。

② キジバト (ハト科)

1年中見られ、特に農耕地に近いところでよく見られた。もともとは林で生活しており「ヤマバト」と呼ばれることもある。1960年代から市街地へ進出し始めたと言われ、よく建造物や街路樹に巣をつくっているのを見かける。

③ ドバト (ハト科)

1年中ふつうに見られる。このハトは、中近東から地中海地方に生息していたカワラバトという野生種から作りだされたものが日本にもちこまれたと言われ、野鳥としては認められていない。「堂鳩」と書かれるように、お寺などに多く住みついているが、その理由として、人がエサを与えること、1年中繁殖できることなどが考えられる。ドバトの増加は、それをエサとするワシ・タカ類の都市進出の要因となっている。

④ コゲラ (キツツキ科)

1年中見られる。キツツキの中ではもっとも小さい。もともと、低い山や山麓の林にすんでいたが、近年、町中でもよく見られるようになり、公園などの樹木に巣をつくることもある。チョウゲンボウとともに新しい「都市進出組」と言われている。

⑤ ツバメ (ツバメ科)

夏鳥として渡来し、町中でも普通に見られる。巣を作る場所は、人家や商店、駅、ガレージなどの軒下で、いずれも人工物である。都市化がすすむにつれて、巣の材料を確保しにくくなったり、巣材が壁につきにくくなったりして、巣作りが困難になっているようである。また、人家への出入りが難しくなったこともその一因となっている。

⑥ ハクセキレイ (セキレイ科)

鹿児島へは冬鳥として渡来し、普通に見られる。町中の水たまりや池などにもよくやってくる。尾羽を上下に振る姿はなじみ深い。橋桁などに集団でねぐらを作ることがよく知られている。

⑦ キセキレイ (セキレイ科)

本県では留鳥として生息しているが、市街地ではおもに冬に見られる。ハクセキレイと同様に、水辺などに多い。

⑧ ヒヨドリ (ヒヨドリ科)

1年中見られるが、冬になると数が増える。もともと森で生活していたが、近年、都市部でもよく見られるようになった。都市部で生活しているものは、雑食化が進んでいると言われる。

⑨ ヒレンジャク (レンジャク科)

冬鳥として不定期的に飛来する。街路樹のクロガネモチや庭木のピラカンサなどの実を食べている数十羽の群れを観察した。

⑩ ジョウビタキ (ヒタキ科)

冬鳥として飛来し、林縁や人家周辺で普通に見られる。ヒッ、ヒッと鳴きながら尾を上下させる姿は愛くるしい。人なつこい鳥で、近くまで寄ってくる。

⑪ ツグミ (ツグミ科)

冬鳥の常連であるが、昨年はほとんど飛来せず、話題になった。今年は比較的よく見られた。林や農耕地、それに庭の柿の木などにもやってくる。

⑫ シジュウカラ (シジュウカラ科)

1年中見られる。林や樹木の多い住宅地でもよく見られ、庭の池などに水飲みや水浴びにやってくる。秋から冬にかけて、ヤマガラ、コゲラなどの他種と群れを作る。

⑬ メジロ (メジロ科)

冬になると山から人里におりてくる。公園や庭にもよくやってきて、サザンカやツバキなどの蜜を吸う。鹿児島では昔から「ハナシ」と呼ばれ、よく親しまれている。

⑭ スズメ (ハタオリドリ科)

1年中見られ、おもに人家付近にすむ。巣は屋根裏や通気孔など、人造物にすることが多く、大木や竹やぶをねぐらにしている。秋、冬にはヨシ原、水田などに大群で見られることがよくある。

⑮ ムクドリ（ムクドリ科）

1年中見られ、村落付近や市街地周辺に多い。巣は樹木の洞のほか、屋根裏、建物のすきまなど人造物にも作る。繁殖期以外は群れで生活し、夕方ねぐらへ入るころ、近くの電線に大群で止まっているのをよく見る。

⑯ ハシブトガラス（カラス科）

1年中見られる。もともとは森や林で生活していたが、市街地で見かけることも多い。早朝、よく路上で動物の死体をあさったり、ゴミ置き場で残飯を食べたりしている。巣はふつう、タブノキ、クスノキ、スダジイなどの常緑広葉樹に作るが、近年、送電塔などの人工物にも作ることが知られている。

国分市街地で見られた鳥たちは、周りの川、田んぼ、林などでも見られた。と言うよりむしろ、その多くは川や田んぼ、山などを主な生活の場としながら、市街地も利用していたと言った方がよいかもしれない。これらの鳥たちにとって、市街地は本来の生活の場では満たされないものを補うための場所となっているようだ。したがって、鳥の種類により、その利用の目的や市街地への依存度は異なっている。

鳥たちが市街地に現れたり、住みついたりする要因としては、いろいろなことが考えられている。その1つは、街路や庭、都市公園などの緑化が進んだことによる。植物が多くなると、その種子や昆虫など鳥のエサとなるものが増えるし、隠れ家や営巣場所なども確保できるからである。また、市街地では、人の生産物を利用しやすいことも大きな要因になっている。ゴミ置き場では労せずして残飯などの食料を確保でき、人家の軒先に巣を作れば天敵におそわれる心配もない。人の生活をうまく利用して生きていると言えよう。

一方、鳥たち自身の変化も都市への進出を可能にしている。例えば、人や車、人工照明、騒音などを恐れなくなったり、食性が変わり雑食性になったりしているのは、都市生活への適応である。そして、自然や野鳥を保護する気持ちを持った人々が増えてきたことも無視できないであろう。

都市化が進むにつれて、すみかを追われてしまう鳥たちは多い。「都市鳥」と呼ばれるような都市での生活に適応し、都市進出を果たしている鳥たちはごく少数派である。近年、国分市では都市化の進行につれて、田んぼや野山など鳥たちの生活を支えてきた自然が少なくなりつつある。人の生活向上のためには止むを得ないことではあるが、野鳥との出会いを楽しめる緑豊かな町であってほしいと思う。

市街地の鳥たち



チョウゲンボウ



キジバト



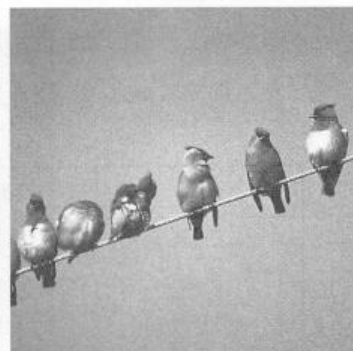
ハクセキレイ



キセキレイ



ヒヨドリ



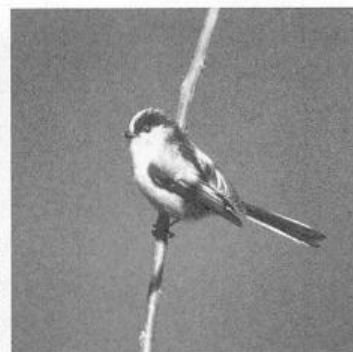
ヒレンジャク



ジョウビタキ



ツグミ



エナガ



シジュウカラ



メジロ



ムクドリ

2 国分・隼人干拓で見られた鳥

天降川河口部に広がる国分・隼人干拓は、野鳥愛好家にはよく知られた所である。この一帯には、干潟、用水路、潮遊池（干拓の周りにある水路でつながった池）、水田、畑、ヨシ原など、環境の異なるさまざまな場所があり、四季を通していろいろな野鳥を観察できる。ここで、参加者はバードウォッチングを楽しみながら、鳥の見分け方や行動について学んだ。

表-1に、調査会での記録と筆者がこの1年間に記録した108種をまとめて記す。なお、見やすさの目安を下に示した。

◎：ほぼ確実に見られる。

○：何回か通えば、見られることが多い。

△：数が少ない、行動範囲が広い、人目につきにくいなどの理由で時々しか見られない。

※：不定期的に飛来し、数も少ないため、まれにしか見られない。

表-1 国分・隼人干拓の鳥

| 科名 | 種名 | 目安 | 季節 | よく見られるところ | |
|--------|-----------|------|-----|------------|------------|
| カイツブリ科 | カイツブリ | ◎ | 冬 | 潮遊池 | |
| | カンムリカイツブリ | △ | 冬 | 河口付近の海上 | |
| カツオドリ科 | カツオドリ | ○ | 冬 | 河口の沖合 | |
| ウ科 | カワウ | ◎ | 1年中 | 干潟・河口付近の岩礁 | |
| サギ科 | ヨシゴイ | △ | 春～夏 | ヨシ原 | |
| | ゴイサギ | ◎ | 1年中 | 田んぼ、ヨシ原 | |
| | アマサギ | ◎ | 1年中 | 田んぼ、潮遊池 | |
| | ダイサギ | ◎ | 1年中 | 田んぼ、潮遊池、干潟 | |
| | チュウサギ | ◎ | 春～秋 | 田んぼ、 | |
| | コサギ | ◎ | 1年中 | 田んぼ、潮遊池、干潟 | |
| | クロサギ | ○ | 1年中 | 河口付近の岩礁 | |
| | アオサギ | ◎ | 1年中 | 田んぼ、潮遊池、干潟 | |
| | カモ科 | マガモ | ◎ | 秋～冬 | 田んぼ、潮遊池、河口 |
| | | カルガモ | ◎ | 1年中 | 田んぼ、潮遊池、河口 |
| コガモ | | ◎ | 秋～冬 | 田んぼ、潮遊池 | |
| オカヨシガモ | | △ | 秋～冬 | 河口 | |
| ヒドリガモ | | ◎ | 秋～冬 | 河口 | |
| オナガガモ | | △ | 秋～冬 | 田んぼ、潮遊池 | |
| タカ科 | シマアジ | ※ | 春と秋 | 田んぼ、潮遊池 | |
| | ミサゴ | ◎ | 1年中 | 河口上空、田んぼ | |
| | トビ | ◎ | 1年中 | 田んぼ | |
| | オオタカ | ※ | 冬 | 田んぼ | |
| | ハイタカ | △ | 冬 | 田んぼ | |
| | チュウヒ | ○ | 冬 | 田んぼ、ヨシ原 | |

| | | | | |
|---------|------------|---|-----|---------------|
| ハヤブサ科 | ハヤブサ | △ | 秋～冬 | 田んぼ, 送電塔 |
| | コチョウゲンボウ | △ | 冬 | 田んぼ |
| キジ科 | チョウゲンボウ | ○ | 冬 | 田んぼ, 電線 |
| | ウズラ | △ | 冬 | 草むら |
| | キジ | △ | 1年中 | 草むら |
| クイナ科 | クイナ | ※ | 冬 | ヨシ原の水辺 |
| | ヒクイナ | △ | 1年中 | 田んぼ, 潮遊池, ヨシ原 |
| | バン | ◎ | 1年中 | 田んぼ, 潮遊池 |
| タマシギ科 | タマシギ | △ | 1年中 | 田んぼ, 用水路 |
| ミヤコドリ科 | ミヤコドリ | ※ | 秋～冬 | 河口の干潟 |
| チドリ科 | コチドリ | ◎ | 春～秋 | 田んぼ, 干潟 |
| | シロチドリ | ◎ | 1年中 | 干潟, 砂浜 |
| | メダイチドリ | ○ | 春と秋 | 干潟 |
| | オオメダイチドリ | △ | 春と秋 | 干潟 |
| | ムナグロ | ○ | 春と秋 | 干潟, 田んぼ, 畑 |
| | ダイゼン | △ | 秋～春 | 干潟 |
| | タゲリ | ◎ | 冬 | 田んぼ |
| シギ科 | キョウジョシギ | △ | 春と秋 | 干潟, 田んぼ |
| | トウネン | ◎ | 春と秋 | 干潟, 田んぼ |
| | ヒバリシギ | ○ | 春と秋 | 田んぼ |
| | オジロトウネン | △ | 春と秋 | 田んぼ |
| | アメリカウズラシギ | △ | 秋 | 田んぼ |
| | ウズラシギ | ○ | 春と秋 | 田んぼ |
| | ハマシギ | ◎ | 秋～春 | 干潟, 田んぼ |
| | コオバシギ | △ | 春と秋 | 干潟, 田んぼ |
| | オバシギ | ○ | 春と秋 | 干潟, 田んぼ |
| | エリマキシギ | △ | 春と秋 | 田んぼ |
| | シベリアオオハシシギ | ※ | 春 | 田んぼ |
| | アカアシシギ | ○ | 春と秋 | 田んぼ |
| | コアオアシシギ | ○ | 春と秋 | 田んぼ |
| | アオアシシギ | ○ | 春と秋 | 干潟, 田んぼ |
| | タカブシギ | ◎ | 春と秋 | 田んぼ |
| | キアシシギ | ◎ | 春と秋 | 干潟, 田んぼ |
| | イソシギ | ◎ | 1年中 | 田んぼ, 岩礁 |
| | ソリハシシギ | ◎ | 春と秋 | 干潟, 田んぼ |
| | ハウロクシギ | ◎ | 春と秋 | 干潟, 田んぼ |
| | チュウシャクシギ | ◎ | 春と秋 | 干潟, 田んぼ |
| | ヤマシギ | ※ | 冬 | 草地 |
| | タシギ | ◎ | 秋～春 | 田んぼ |
| セイタカシギ科 | セイタカシギ | △ | 春と秋 | 田んぼ |
| ヒレアシシギ科 | アカエリヒレアシシギ | △ | 春と秋 | 田んぼ |
| ツバメチドリ科 | ツバメチドリ | △ | 春と秋 | 畑, 田んぼ |
| カモメ科 | ユリカモメ | ◎ | 冬 | 干潟 |
| | セグロカモメ | ◎ | 冬 | 干潟 |
| | ウミネコ | ◎ | 冬 | 干潟 |

| | | | | |
|---------|----------|---|-----|-------------|
| | ズグロカモメ | △ | 冬 | 干潟 |
| | クロハラアジサシ | △ | 春と秋 | 田んぼ |
| | コアジサシ | ◎ | 春と秋 | 干潟 |
| ハト科 | キジバト | ◎ | 1年中 | 畑地, 田んぼ |
| アマツバメ科 | ヒメアマツバメ | ○ | 春と秋 | 上空通過 |
| | アマツバメ | ○ | 春と秋 | 上空通過 |
| カワセミ科 | ヤマセミ | △ | 冬 | 潮遊池 |
| | カワセミ | ○ | 1年中 | 潮遊池 |
| キツツキ科 | アリスイ | △ | 冬 | ヨシ原の灌木 |
| ヒバリ科 | ヒバリ | ◎ | 1年中 | 畑地, 田んぼ |
| ツバメ科 | ショウドウツバメ | △ | 秋 | 上空 |
| | ツバメ | ◎ | 春～秋 | 上空 |
| | コシアカツバメ | ○ | 春と秋 | 上空 |
| セキレイ科 | ツメナガセキレイ | ○ | 秋 | 田んぼ |
| | ハクセキレイ | ◎ | 冬 | 田んぼ, 畑, 用水路 |
| | マミジロタヒバリ | △ | 春と秋 | 田んぼのあぜ, 畑 |
| | ムネアカタヒバリ | ○ | 秋～春 | 田んぼのあぜ |
| | タヒバリ | ◎ | 冬 | 田んぼ, 畑 |
| モズ科 | モズ | ○ | 秋～冬 | 田んぼ, 畑 |
| ツグミ科 | ノゴマ | ※ | 秋 | ヨシ原 |
| | ジョウビタキ | ○ | 冬 | ヨシ原 |
| | ノビタキ | ◎ | 秋 | 田んぼ, 畑 |
| | イソヒヨドリ | ○ | 1年中 | 防波堤, 岩礁 |
| | ツグミ | ◎ | 冬 | 田んぼ, 畑 |
| ウグイス科 | オオヨシキリ | ◎ | 春～夏 | ヨシ原 |
| | セッカ | ◎ | 1年中 | 草地 |
| ツリスガラ科 | ツリスガラ | ○ | 冬 | ヨシ原 |
| ホオジロ科 | ホオジロ | ○ | 冬 | 草むら |
| | ホオアカ | ◎ | 冬 | 草むら |
| | カシラダカ | △ | 冬 | 草むら |
| | アオジ | ○ | 冬 | ヨシ原 |
| | オオジュリン | ◎ | 冬 | ヨシ原 |
| アトリ科 | カワラヒワ | ◎ | 1年中 | 田んぼ, 畑 |
| ハタオリドリ科 | スズメ | ◎ | 1年中 | ヨシ原, 田んぼ, 畑 |
| ムクドリ科 | ホシムクドリ | ※ | 冬 | 田んぼ, 畑 |
| | ムクドリ | ◎ | 1年中 | 田んぼ, 畑 |
| カラス科 | ミヤマガラス | ◎ | 冬 | 田んぼ, 畑 |
| | ハシボソガラス | ◎ | 1年中 | 田んぼ, 畑 |
| | ハシブトガラス | ◎ | 1年中 | 田んぼ, 畑 |

国分・隼人干拓の鳥たち



ヨシゴイ



アマサギ



カルガモ



チュウヒ



ハヤブサ



ヒクイナ



コチドリ



タゲリ



バン



ヒバリ



オオヨシキリ



セツカ

3 国分の城山公園で見られた鳥

ここでは、昼食前後の短い時間を使って観察をした。鳥の動きの少ない時間帯でもあり、あまり多くの種類は観察されなかったが、特筆すべきこととしてヒメアマツバメの営巣を確認した。巣は4つで、展望台の地上約20mの軒下に作られていた。県内では数少ない例である。観察された種を以下に記す。

留鳥 トビ、キジバト、ヒメアマツバメ、コゲラ、アオゲラ、ヒヨドリ、ウグイス
スズメ、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ
ムクドリ、ハシブトガラス、ハシボソガラス

夏鳥 ツバメ

冬鳥 ハクセキレイ、ピンズイ、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、アオジ

旅鳥 アカハラ

おわりに

博物館自然リサーチの鳥班には、52名の親子が参加した。「鳥は可愛いから」「鳥をたくさん見たいから」「鳥の名前を覚えたいから」などなど、目的は様々である。野鳥に関心をもっている親子がこんなにたくさん集まるとは驚きであった。と同時に、バードウォッチングの底辺の広がりを実感した。

野鳥観察は初めてという人が多く、退屈する子供が多いのではないかと思っていたが、その心配は無用であった。「鳥の気配がするよ」と言えば、一心になって探し、見つけるやいなや友だちや親にその居場所を教える。すると、親は図鑑をめくり、その鳥の名前を子供に教える。実に微笑ましい光景が随所に見られた。また、鳥がいないときでも、子供は周りの草花を摘んだり、昆虫を捕ったりして、思い思いの“自然観察”を楽しむ。親たちも、いつしか子供たちに引き込まれて周りの自然と一緒に観察するようになっていた。ここでは、子供たちが自然のよき総合案内をしてくれたように思える。

子供たちと一緒に歩きながら、彼らの屈託のない楽しそうな姿を目の当たりにして、自然の人を引きつける魅力、包み込む暖かさのようなものを感じた。そして、子供たちにとっては、このような自然の中に身を置くこと自体が最も有意義なことであり、個々の事象にことさら合理的な説明を加える必要はないような気持ちにさえなった。

参加者にとって、今回の体験が今後の自然との出会い、親子のふれあいのきっかけとなれば幸いである。



楽しいバードウォッチング

鳥が大好きになった自然リサーチ

隼人町立富隈小学校4年 田中宏明

ぼくが、自然リサーチに参加することになったわけは、お母さんが新聞を見ていたときぐうぜん自然リサーチのニュースを見つけたからです。鳥、植物、昆虫、岩石の4種類の中で、ぼくは鳥を選びました。「鳥って、けっこう楽しそうだな」と思ったからです。

その日は、国分の干拓地や城山に行って鳥を見ました。干拓地ではアオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、カルガモ、セッカ、バンなどがいました。バンは、水辺のやぶの中にいました。また、城山には、ヒメアマツバメ、ヒヨドリ、トンビ、ハシボソガラス、ハシブトガラスがいました。トンビは、すごく高い所を、風に乗って羽ばたかずに飛んでいました。ぼくは、すごいなと思いました。ふつうのツバメより小さくてつばさが後ろに曲がっていることなどを教えてもらいました。この日は、暑くて汗をいっぱいかいて、すごく疲れました。でも、今まで知らなかったことがいろいろ分かって良かったです。

例えば、カラスには、ミヤマガラス、ワタリガラス、ハシボソガラス、ハシブトガラスなどがあることや、シラサギという鳥はいなくて、ダイサギ、チュウサギ、コサギをまとめてシラサギということを知って教えてもらいました。観察がすんだら、鳥の写真や模型を見せて説明してもらいました。一日でいっぱい鳥のことを知りました。

ぼくは、この日から鳥にきょうみをもって、家の近くを流れている天降川にお父さんといっしょに朝早くから行くようになりました。メモ帳に見つけた場所と鳥の名前を書きました。分からないのは、図かんを買って調べました。朝早くなので寒いけど、まだ見たことがない鳥を見つけると、すごくうれしくなります。

カワセミを見つけたときが一番うれしかったです。天降川の岸に立っていた時、見たことがない鳥が2羽、水面をつつきながら飛んでいたんです。くちばしが長くて体がきれいな青っぽい色をしていました。帰ってから図かんを調べたら、カワセミだったのです。

ぼくは、夏休みには、自由研究に鳥を調べたことを書きました。自然リサーチに参加して、いろいろなことを見たり知ったりして、とてもうれしかったです。



へー、そうなの、ふーん

体験は将来の財産

隼人町 田中 智

私たち家族は、公的に催される研修とか企画に積極的に参加するようにしています。今回の博物館自然リサーチにも、身近な国分・隼人で開催されるということを新聞で知って参加することにしました。

私の家族は、鳥の観察グループに入りました。鳥のグループは人数が少なく、指導者の方から直接色々な話を伺える機会が多くなるのでは、と期待したからです。それが、あに凶らんや、蓋をあけてみると総勢50人を越える大集団で観察することになりました。国分・隼人周辺は、天降川、国分干拓周辺と鳥が非常に多く、皆さん鳥に興味を持っておられたようでした。おそらく、どの家族も子どもさんより親の判断で鳥の観察を選択された方が多かったものと思います。しかし、子どもたちの食欲は大したもの、いつも子どもたちが先頭を引っ張って歩いていたように思います。

観察会は4回開催されましたが、おかげさまで、子どもだけでなく私も鳥の観察の虜になってしまいました。夏休みは、休日の度に子どもと一緒に天降川河畔の鳥たちを観察しました。空が白々と明けてくる朝6時頃、鳥たちはもう起き出して食事を済ませて帰っていくところです。観察会で教えてもらったハシボソガラス、ハシブトガラス、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギ、セッカ、ヒヨドリ、オオヨシキリ、モズ、それに珍しいカワセミやキジまでも、すぐ近くに住んでいることが判ったのです。以来、鳥の声を録音したCD-ROMも購入して声の主を調べるなど、いろいろと鳥を楽しんでいます。

私は、子どものうちに色々なことに興味をもって様々な体験をしていくことが、子どもにとって将来大きな財産になると思っています。絶滅する生物の保護の問題、地球環境保全の問題等、新聞やテレビでは見聞きしていても、こうして自分が実際に観察した生き物の問題として捉えると、理解と関心の深さが大きく異なるように思います。子どもにとって、そして私自身にとっても貴重な体験をさせていただいたこの企画がいつまでも継続されることを願ってやみません。



カワセミ



モズ